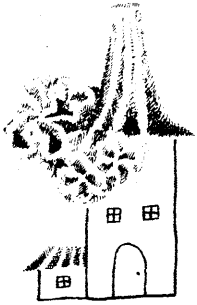
〈巻頭言〉

三月によせて

清水　光子



「蝶々の行方ひろびろと霞かな」この俳句は倉橋惣三先生が昭和十六年三月、東京女高師（現お茶の水女子大学）の保育実習科という課程の卒業生に乞われるままに色紙にかかれた〝送ることば〟である。〝どこかで春が生まれてる……〟自然は着実にあらゆるいのちあるものを生かし、成長させはじめている三月。

古くから二月は逃げる、三月さわぐということばがある。公教育の場でもそう言えばそうね、と諾（うべ）なうような場面が多いように思う。

そんなことを考えながら、倉橋惣三先生の「育て

の心」の「三月」をあらためて読んで心に深くしみた。「芽が出ていましたと告げに来る子がある。花を見つけたといって飛んで来る子がある。つれられて行って見ると、その芽は低い雑木の枝の端の小さい緑粒であり……後略。」「『まだ、こんな小さいの……』またしても、こんなことをいうのがおとなだ。『まだ……』それは将来をのみ待って今を見落とす心、将来にのみ重きをおいて今を軽んずる心の、あさはかにも、すげない、つぶやきの声である。」「芽と蕾の今の春を『まだ……』としか受けとり得ない、」「欲ふかな、おとなの心である」。

三月の春は早く子どもらに来る。その中でその時々に、それぞれに享ける子どもらの小さい春を一ぱいに楽しませてやりたいものである。自然の中で、自然とともに。

なお、「育ての心」は自ら育つものを育たせようとする心である、教育は育つものに対する信仰であり、この信仰が与える光明によって子どもらとともに笑い、遊び（或るときは悲しみ心配して）生活できるのだ、との文章に深く感じいった。

北原白秋の童謡に（又しても蝶々であるが）蝶々蝶々三月二月霧雲はやい、ぬれぬれとべよ、からまつ山は、もう芽がのびる、大きくとべよ、霧雲さむい、気深くとべよ、とやさしいはげましをこめてうたってあるのを思い出す。

或る高名なエッセイストのことばに「人間は三歳までに一生分の親孝行をしていますよ、赤ちゃんの可愛らしさとはそういうものです。それ以上の期待を子どもにしちゃいけませんよ」とあって、なるほど！　と思ったことである。子どもたちの心の奥にある光るようなやさしさ、伸びようとする逞しいエネルギーをしっかり受けとめ、見守りながら、ともに三月を楽しみたいものである。

（音羽幼稚園）